

エンタープライズ寄港阻止闘争と 福岡のベトナム反戦市民運動

市橋秀夫*

「エンタープライズ寄港阻止闘争(=佐世保闘争)」とは、日本への核兵器持ち込みの道をひらき、ベトナム戦争への日本の関与を深めることになるとみなされた米原子力航空母艦エンタープライズの佐世保寄港阻止を掲げ、野党政党、総評をはじめとする労働組合関係諸組織、学生運動諸組織、さらには市民運動や文化運動団体が幅広く取り組んだ1968年1月の寄港反対運動をさす。エンタープライズは1月19日午前に入港、23日の午前9時に出港した。

当時のマスメディアは、佐世保米海軍基地へと至る2つの橋上での三派系全学連学生と警備警察との「激突」を競って報じたが、同時に、その三派系学生を機動隊の過剰な暴力による弾圧から守ろうとする「佐世保市民の誕生」についても大きく報じた。こうした報道の基底には、社会運動史や民衆運動史研究においてみられる、抗議主体についての「実力行使派」と「穏健派」、「暴力」と「非暴力」という二分法的な発想があり、佐世保闘争の過程で両者のあいだに相互性や重層性が生成したという理解がある。

本稿では、福岡市を中心としたベトナム反戦市民運動参加者の佐世保闘争経験、とりわけ3名の九州大学生の佐世保闘争への具体的ななかかわり方を明らかにする中で、相互性や重層性を指摘するだけではなく、その前提とされている「過激派」と「市民派」という二分法的な類型では理解しえない運動主体のあり方に注目する。本稿で用いるオーラル・ヒストリーの手法は、そうした運動主体のダイナミズムを明らかにするという効用を持つ。

こうした運動主体の流動的な性格に注目することは、運動の成果や持続性、効果といった側面から評価を下しがちな当事者運動組織研究や社会運動史研究において見落とされることの多い、運動の基底に見出されるエネルギーやダイナミズムに光をあてることになるだろう。

キーワード: エンタープライズ寄港阻止闘争、佐世保闘争、ベトナム反戦市民運動、福岡、十の日デモの会、ベ平連、暴力

* いちはし・ひでお、埼玉大学教授、歴史学

本稿はJSPS 科研費17K04187「在日米軍基地におけるベトナム反戦運動についての研究」(研究代表者・木原滋哉)の助成を受けた研究成果の一部である。

<目次>

1. はじめに
 - 1-1. 「激突政治」としての佐世保闘争
 - 1-2. 佐世保闘争の特色
 - 1-3. 佐世保闘争に関する先行研究と本稿の課題
 - 1-4. 本稿の構成
2. 反戦市民運動団体と佐世保闘争
 - 2-1. 福岡市民とエンタープライズ寄港——「十の日デモの会」
 - 2-2. 十の日デモの会と「北九州ベトナム反戦の会」
 - 2-3. 十の日デモの会と「佐世保ベ平連」および「一九日市民の会」
3. 十の日デモ参加学生の佐世保闘争経験——3人の事例
 - 3-1. 平井孝治の佐世保闘争経験にみる非暴力直接行動と「市民」
 - 3-2. 梅村浄の佐世保闘争経験
 - 3-3. 平嶋康昌の佐世保闘争経験に見る「個人」で動く反戦運動
4. まとめにかえて

1. はじめに

1967年9月に最初の東南アジア訪問を終えた佐藤栄作首相は、10月8日には南ベトナムを含めた東南アジアとオーストラリア、ニュージーランドへの訪問に出発した。この南ベトナム訪問は国民世論の広範囲な抗議行動を引き起こし、「10・8羽田闘争」あるいは「第一次羽田闘争」と呼ばれる学生・労働者の実力街頭闘争が取り組まれた。三派系全学連と反戦青年委員会は、この外訪を日本のベトナム戦争への一層の加担を示すものと見做し、首相の離日を実力で阻止すべく羽田で警官隊と衝突した¹。この闘争における京都大学生・山崎博昭のいたましい死は、全国の同世代の大学生・高校生に大きな衝撃を与えた²。

日本におけるベトナム反戦運動のパイオニア的研究者ヘイブズは、1967年9月に佐藤首相が「東南アジアに旅立った時点では、日本の反戦運動はまだまだ限られたもの」だったが、10月の第一次羽田闘争が「ベトナム反戦運動の

¹ 「三派系全学連」とは、1966年12月、ブント系の社学同（社会主義学生同盟）、革共同中核派、社青同解放派を中心として組織された。三派は大衆闘争を重視し、共産党の民青系全学連や、革共同革マル派系全学連と対立しつつ、大学闘争や70年安保闘争を担った。また、「反戦青年委員会」は、社会党および総評が呼びかけ、社青同（社会党系の青年政治組織である社会主義青年同盟）および総評系労組青年部が主軸となって作られた反戦運動組織である。1960年結成だが、1968年以降に相次いで再建され急進化したとされる。第一次羽田闘争の中心となったのは、三派系全学連が約2,000人、反戦青年委員会が約800人とされている（油井大三郎『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』岩波書店、2019年、161頁。）。

² 第一次羽田闘争およびそれが当時の大学生に与えたインパクトについては、10・8山崎博昭プロジェクト編『かつて10・8羽田闘争があった——山崎博昭追悼50周年記念[寄稿篇]』合同出版、2017年および同編『かつて10・8羽田闘争があった——山崎博昭追悼50周年記念[記録資料篇]』合同出版、2017年を参照のこと。羽田闘争は、つねに山崎博昭の死に焦点を結ぶかたちで振り返られている。ベトナム反戦の意識を持ちさまざまな活動に取り組んでいた大学生や高校生たちは、山崎の死を機に、自身の反戦運動への関わり方を厳しく問い直すことになった。

転換点となった」と指摘、第二次羽田闘争となる 67 年 11 月の「訪米の時までには、それまで指一本動かしたことも、声一つ出したこともなかった人びとまでが波打ちをはじめることになる」と述べた³。油井大三郎は、マスコミや共産党による三派系学生の「暴力」批判にふれながら、第一次羽田闘争は、「国民世論の保守的部分を『暴力反対』で結集させ、自民党政権に有利なる側面ももったが、他方で青年層の核心的部分を目覚めさせ、参加者を増やす効果ももった」⁴と指摘している。アメリカ合衆国の日本史研究者ウィリアム・マロッチィは、第一次羽田闘争での三派系学生による暴力の使用の新規性を「公表された国家政策の遂行を阻止する手段としての暴力の使用」にあるとし、それが結果的に「物理的な力それ自身を抗議者と国家の衝突において前景化」することになったと述べ、第一次羽田闘争を起点として日本における「1968 年」記述の筆を起こしている⁵。治安当局もまた、20 年後、この第一次羽田闘争について「警察部隊に対する計画的な攻撃、大量の武器（角材、石塊等）の使用等の点で飛躍的に悪質化した闘争」とし、『70 年闘争』の主役として極左暴力集団の士気を高め」るなど、「その後に重要な影響を与えた」と振り返っている⁶。

日本における学生および青年労働者のベトナム反戦運動、さらには市民のベトナム反戦運動が、この羽田闘争を最初の契機として大きく変容していったことは誰もが認めているとあっていいだろう。しかし、日本各地で一様の影響をおよぼしたわけではない。本稿では、福岡の市民的ベトナム反戦運動だった「十の日デモ」⁷に参加していた人びとがエンタープライズ寄港阻止闘争（以下、佐世保闘争と記す）をどのように経験したのかを検討するが、その検討から言えることは、学生、労働者、市民いずれが主体となったベトナム反戦運動であれ、福岡においては、反戦運動の変容、とりわけ運動の質の変容は羽田闘争ではなく、そのおよそ 3 か月後の 1968 年 1 月に起きた佐世保闘争⁸を契機に顕在化したということである。

1-1. 「激突政治」としての佐世保闘争

³ トーマス・R・H・ヘイブズ（吉川勇一訳）『海の向こうの火事——ベトナム戦争と日本 1965-1975』筑摩書房、1990 年、172、176 頁。ベ平連研究の第一人者である平井一臣も、東京のベ平連の若い活動家となる山口文憲や井上澄夫らが第一次羽田闘争、とりわけ山崎博昭の死の衝撃が反戦運動に参加することになる契機となったと述べている（平井一臣『ベ平連とその時代——身ぶりとしての政治』有志舎、2020 年、146-47 頁）。

⁴ 油井大三郎『平和を我らに』岩波書店、2019 年、163 頁。

⁵ William Marotti, 'AHR Forum Japan 1968: The Performance of Violence and the Theater of Protest', *The American Historical Review*, 114(1), 2009, pp. 97-135, especially p. 100.

⁶ 『昭和 63 年版 警察白書』（<https://www.npa.go.jp/hakusyo/s63/s630101.html>、2019 年 11 月 27 日アクセス）。ちなみにこの昭和 63 年（1988 年）版警察白書の副題は「『テロ、ゲリラ』の根絶を目指して」である。

⁷ 「十の日デモ」については、市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動の一研究——福岡・十の日デモの時代(1)～(3)」『日本アジア研究』11～13 号、2014～16 年を参照のこと。

⁸ 佐世保闘争については、当時は新聞や週刊誌で大々的に報じられたものの、佐世保闘争それ自体に焦点を当てた研究は、一部ウェブ上に存在する回顧や回想以外に活字化されたものは存在していないと思われる。

佐世保闘争とは、日本への核兵器持ち込みの道をひらき、ベトナム戦争への日本の関与を深めることになるとみなされた米原子力航空母艦エンタープライズの佐世保寄港阻止を掲げて、野党政党、総評をはじめとする労働組合関係諸組織、学生運動諸組織、さらには市民運動や文化運動団体が幅広く取り組んだ1968年1月の寄港反対運動をさす。「エンタープライズ寄港阻止闘争」、あるいは「佐世保事件」とも呼ばれる。エンタープライズ号は、1月19日午前に入港、当初の5日間停泊の予定を変更、23日の午前9時に出港した。

羽田闘争をベトナム反戦運動が広がっていく一大転換点だと述べていたヘイブズは、佐世保闘争については「反戦運動の一大高揚の瞬間」だと位置づけ、「それから二〇年を経た現在の日本の中でも、他のいかなる反戦行動にもまして鮮明に記憶されている一週間にわたるドラマであった」⁹と書いてその劇的性格を強調している。米軍基地へとつながる2つの橋の上で三派系全学連の学生たちが治安当局と繰り広げた「激突」という劇的イメージは、当時の新聞や雑誌記事などのメディアが競って報じたもので、ヘイブズを含め私たちの佐世保闘争のイメージもこうした報道によって形成されたところが大きい。メディア報道を通して白日の下にさらされた、佐世保闘争における過剰な国家の暴力こそが日本の1968年におけるより広範囲な市民や一般学生の政治化をもたらしたとするマロッチェもまた、新聞社の所蔵する鮮烈な激突現場写真を巧みに提示しつつ、佐世保闘争によって示された暴力と非暴力のパラドキシカルで両義的な関係を論じている¹⁰。

この「激突」は、エンタープライズ号が実際に入港する前の前哨戦ともいえる一連の出来事からすでに始まっていた。そもそも三派系全学連は、佐世保闘争を67年秋の二次にわたる羽田闘争に続く第三の羽田闘争と位置付けて準備を進めていた¹¹。彼らは、1月6日に福岡市六本松の九州大学教養部キャンパスで全九州学生総決起集会を開催し、三派系全学連委員長の秋山勝行(中核派)が記者会見を開いた。九州大学の学生会館を佐世保への出撃拠点と位置付けた三派系の学生たちが、全国から福岡に集結することが予想された。その過程で、1月15日には東京・国電飯田橋駅頭において九州に向おうとした三派系全学連学生約260名を警察当局が阻止、角材付きプラカード所持などを理由に凶器準備集合罪と公務執行妨害で131名を逮捕する「飯田橋事件」が発生した。

そして、1月16日には「博多駅事件」が起こっている。エンタープライズの寄港が迫るなか、朝6時45分着の列車で博多駅に到着した学生約400名が150人の国鉄公安職員が待機する7・8番ホームに降り立った¹²。闘争の宿泊拠点となるはずの九州大学教養部キャンパスに向かうためである。しかし、現場で一部始終を見守っていた九大法学部長(当時)の井上正治によれば、「数百

⁹ トーマス・R・H・ヘイブズ『海の向こうの火事』筑摩書房、1990年、193-94頁。

¹⁰ William Marotti, 'AHR Forum Japan 1968: The Performance of Violence and the Theater of Protest', *The American Historical Review*, 114(1), 2009, especially pp. 112-132.

¹¹ 12月に開催された三派系全学連大会で「佐世保を第3の羽田に」のスローガンが決められた。「1000号記念! 秋山勝行 × 金山克巳 元全学連委員長対談 闘う学生を熱く迎えた三里塚」、『週刊「三里塚」』1000号、2018年9月24日号 (<http://www.zenshin.org/zh/s-kiji/2018/09/s10000201.html>、2022年9月12日アクセス)。

¹² 『朝日新聞』東京版、1968年1月16日夕刊。

名の機動隊は何重にも横隊になって完全に出口〔改札口——筆者注〕をふさいでしまっていた¹³ために構内から出られずにいた。繰り返される退去勧告とにらみ合いが続いたあと、学生たちの後ろからは鉄道公安機動隊が押し、前からは福岡県警機動隊員が改札口から入ってきた¹⁴。井上はその際の機動隊の行為について次のように記している。

「百名に余る機動隊員が、改札口を突きぬけ階段を駆け上がって、学生の隊伍の中に突撃していった。その突っ込みぶりは突撃という言葉をもってするほか表現のしようがない。彼らは学生を蹴散らした。それからそこに展開した光景は悲惨きわまりなかった。警察官は学生一人一人の襟首をつかんで階段の下まで投げとばしたのである。……」¹⁵

こうして改札を押し出されてきた学生たち一人ひとりに対し、警備当局は持物および身体検査を強行した。井上は1月24日、警察の三派系全学連学生に対する「警察の過剰警備」「警察の暴力」について、人権侵害の疑いで福岡法務局¹⁶に申し立てをおこなった。これがいわゆる「博多駅事件」である¹⁷。

博多駅を抜け出た学生たちは、市中をデモ行進しながら福岡市内六本松の九州大学教養部キャンパスへと向かった。すでに前日の1月15日には反帝学評の学生たちが教養部の学生会館を占拠していた。施錠のうえ閉鎖されていた教養部正門前に集まった学生たちの背後には、取り囲む機動隊があった。最終的に大学は、学生の身の安全と警察の大学への介入を回避するべく池田数好教養部長の判断で正面入口を開門¹⁸、およそ490人の学生が教養部キャンパスの学生会館を占拠したとされる¹⁹。エンタープライズは19日に寄港、23日に出港

¹³ 井上正治「九州大学はなぜ門を開いたか——警察の過剰警備に抗議する」『中央公論』1968年3月号、223頁。この井上の寄稿に対しては、博多駅の警備を指揮していた福岡県警察本部長の前田利明が「警察官の人権は誰が擁護するのか——九州大学法学部長への反駁」『中央公論』1968年4月号、74-81頁で、反論をおこなった。16日の朝博多駅に動員された機動隊などの警官隊は1,300人と報道されていた（『朝日新聞』西部版、1968年1月16日夕刊）。

¹⁴ 『朝日新聞』西部版、1968年1月16日夕刊。

¹⁵ 井上正治「九州大学はなぜ門を開いたか——警察の過剰警備に抗議する」『中央公論』1968年3月号、223頁。

¹⁶ 人権擁護に取り組んでいる国の機関が法務省人権擁護局、その地方支分部局（全国8カ所）が法務局と呼ばれ、福岡市には福岡法務局が置かれている。

¹⁷ 飯田橋事件および博多駅事件についての当局側の見解については、福岡県警察史編さん委員会編『福岡県警史 昭和後編』福岡県警察本部、1993年、605-14頁を参照のこと。「博多駅事件」では学生4人が公務執行妨害罪で逮捕され1人が起訴されたが、福岡地裁が1969年4月に「警察の過剰警備」などを理由に無罪判決を出し、福岡高等裁判所も1970年10月一審判決を支持、無罪が確定した。ただし、高裁では、警察の実力行使については適法とし判決が確定した。なお、博多事件では「博多駅テレビフィルム提出命令事件」と呼ばれる報道の自由をめぐる裁判も起きている。

¹⁸ 開門の理由を池田数好教養部長自ら語った報道として、『朝日新聞』西部版、1968年1月17日朝刊がある。

¹⁹ 九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史 第2巻：通史編Ⅱ』312頁；井上正

したが、佐世保米軍基地周辺での「激突」は1月17日から21日まで続き、九大教養部学生会館は1月15日から23日まで占拠されて三派系学生の連日の出撃拠点となった。

佐世保闘争での「激突」の展開を簡単にみておく。佐世保米軍基地のメインゲートから侵入するためには、佐世保駅側からは平瀬橋か佐世保橋を渡る必要があった(図1参照)。

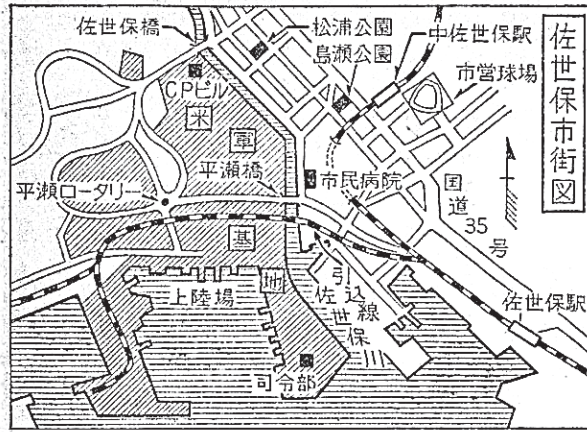


図1. 米軍佐世保基地周辺図

出典：『中央公論』1968年3月号、193頁。

1月17日正午前、平瀬橋で最初の「激突」が繰り広げられた。警備側は催涙効果を持つガス弾を200発放ったとされ²⁰、激突した学生のみならず、市民や報道陣にもこん棒を振り下ろした。平瀬橋の角に建つ市民病院に逃げ込もうとする学生や市民を乱打した様子が報道され、意識不明の重体となった九大教養部2年の女子学生もいた²¹。市民や世論の強い批判が起

こり、警備本部は謝罪に追い込まれた²²。アメリカ大使館も認識していたように、「警察側は人びとの支持を大きく失い、学生に厳しく対処する権威の一部も失った」²³のである。三派系全学連の学生たちは、18日にも、社会党と共産党が共催し市営球場で4万人以上が集まったとされる「原子力艦隊寄港阻止佐

治「九州大学はなぜ門を開いたか——警察の過剰警備に抗議する」『中央公論』1968年3月号、221-28頁；同「大学の自治と警察権力」『法学セミナー』144号、1968年3月、2-9頁；同「警察・大学・学生」『展望』1968年3月号、69-72頁；同「『大学自治』論争——一つのカッコ論について」『ジュリスト』393号、1968年3月15日、84-87頁を参照のこと。『朝日ジャーナル』掲載の座談会（「座談会 大学は大学人が守る」『朝日ジャーナル』1968年2月25日号、20-25頁）では、大学管理側当事者の一人でもあった井上正治が、学生会館の占拠は管理責任を負っていた複数の大学教員と学生との相互コミュニケーションがまがりなりにも成立していた上での出来事だったと指摘し、占拠学生の自己規律と自治能力への信頼を語っている点に注意が払われるべきであろう。『世界』に寄稿した九大助教授の数学者倉田令二郎（倉田令二郎「佐世保事件と大学の自治——教師の記録から」『世界』1968年3月号、101-108頁）もまた、占拠学生や闘争参加学生に対しては井上と類似した見解を明らかにしている。なお、福岡県警は結局、闘争最終日となった1月21日に強制捜索令状を取って学生会館に入った。

²⁰ 『朝日新聞』西部版、1968年1月17日夕刊。

²¹ 『毎日新聞』西部版、1968年1月18日朝刊。

²² 『朝日新聞』西部版、1968年1月17日夕刊および1月18日朝刊。

²³ Airgram A-1098, 'The Enterprise Visit', February 23, 1968, DEF 7 JAPAN-US, in Reel 3, Confidential U.S. State Department Central Files, JAPAN 1967-1969, Part 1: Political, Governmental, and National Defence Affairs [microfilms], 2007.

世保大集会」²⁴に参加したあと、佐世保橋に向って警官隊と「激突」している。エンタープライズが入港した 19 日午前中にも、三派系学生は再び佐世保橋で警官隊と「激突」した。土曜日となった 20 日には学生たちはデモをおこなわなかったが、1 月 21 日午後、学生たちは再び佐世保橋で阻止線を固める機動隊と「激突」、その間に中核派の学生 2 名が、干潮で浅瀬となっていた佐世保川を渡りフェンスを乗り越え基地に侵入した²⁵。

以上の 4 回が佐世保闘争での「激突」を構成したのだが、この間の市民の動きについては後段で詳しく述べる。あらかじめかいつまんで述べておけば、17 日の機動隊の行き過ぎた暴力行為が明らかになって以降、市民の学生への同情や応援は高まり、21 日にはいわゆる「佐世保市民」の「誕生」や「登場」が目撃されることになる。

1-2. 佐世保闘争の特色

佐世保闘争が羽田闘争と大きく異なるのは、三派系学生や反戦青年委員会系の青年労働者に反対する共産党をはじめ、全野党政党が大規模集会やデモのかたちで現地闘争に取り組んだこと²⁶や、市民運動やセクトに所属しないノンポリ学生の広範囲な参加があったことがあげられる。そして、佐世保市民をはじめとする多数の見物人が学生と機動隊の激突現場を目撃し、警察や機動隊の行き過ぎた暴力的弾圧行為に批判が集まった。突出した活動家たちだけの反対闘争ではない広がりをもっていた。

全国にも、テレビや新聞、週刊誌など、多くのマスメディアをとおしてその激突現場は報道されて伝わった。そこでも、角材を持って治安当局と激突した三派系全学連の学生たちへの非難よりも、学生に対する治安当局側の激しい弾圧への批判に重きが置かれている。佐世保市のみならず全国的にも、治安当局に対する世論の広範な反発を招いたのが 1968 年 1 月の佐世保闘争だったので

²⁴ この集会の正式名称は「アメリカのベトナム侵略反対、沖縄・小笠原返還要求、原子力艦隊寄港阻止佐世保大集会」（月刊社会党編集部『日本社会党の三十年（3）』社会新報、1975 年、313 頁）。

²⁵ 水谷保孝「1968 年は佐世保エンブラ闘争で始まった」『野次雑記』no. 501、2018 年 9 月（ウェブ・ブログ：<http://meidai1970.livedoor.blog/archives/1365879.html> 2022 年 10 月 29 日アクセス）。水谷は中核派のデモ隊指揮者として佐世保闘争に参加して基地に侵入した一人で、この史料は水谷の回想記録である。また、渡河による基地侵入のアイデアは、長崎で総評の労働運動に従事していた山下弘文のものだったという（山下弘文『諫早に死す：山下弘文・自伝』南方新社、2001 年、145-47 頁）。

²⁶ 社会党と総評はそれまでの米原潜寄港阻止全国委員会を米原子力艦船寄港阻止実行委員会と改組して取り組み、常駐行動隊 30 人を現地派遣した。また、共産党は安保破棄要求貫徹中央実行委員会を組織していた。社会党・総評と共産とのあいだでは中央段階での共闘は実現しなかったが、1 月 18 日、両組織は「現地共闘」というかたちをとり佐世保市民球場で 47,000 人規模（警備本部発表では 23,000 人余）の集会を開催しデモをおこなった。民社党、公明党も別途抗議集会やデモをおこなった（21 日にも開催）。以上については、福岡県労働組合評議会編『福岡県評二十年史』福岡県労働組合評議会、1976 年、772-73 頁；大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 第 39 集／1969 年版』労働旬報社、1968 年、353-58 頁；日本共産党中央委員会出版局編『政治年鑑 1969 年版』日本共産党中央委員会出版局、1969 年、293 頁を参照のこと。

ある²⁷。

エンタープライズの寄港は、被爆地である長崎県を出撃基地とするベトナム戦争の激化がもたらされることを意味し、それに日本が加担することは許されないと反対運動側は捉えていたが、寄港反対に広範な国民各層の支持を得られたのは、核兵器の持ち込みの疑いと、動力機関として搭載されている原子炉からの放射能漏れへの不安という、戦後日本人の反核感情を波立たせる要素があったことが指摘されている²⁸。さらに、多数のジェット戦闘機を搭載する巨大航空母艦（75,700トン）であるエンタープライズの巨大な戦争機械としての圧倒的な視覚的存在感が、1964年以來たびたび日本に寄港していた米原子力潜水艦とは異なり、強い威圧感や恐怖心を与える象徴、記号として人びとに深く食入るものだった点も指摘できよう²⁹。エンタープライズは「動く核基地」³⁰とも表象されていた。エンタープライズの寄港は加害と被害の両方の忌避感情を醸成した。

1-3. 佐世保闘争に関する先行研究と本稿の課題

佐世保闘争を中心的に論じた研究としては、まず、平井一臣の論文³¹を取りあげなくてはならない。平井論文は、1964年11月の原子力潜水艦シードラゴンの佐世保入港以降の前史的状況を概観したあと、三派系全学連の学生が警官隊と衝突した佐世保闘争を「激突政治」（‘confrontational politics’）と位置づけ、それに対する反応としての佐世保市民によるデモの出現や市民運動団体「十九日市民の会」の発足を取りあげて論じている。さらに、エンタープライズ入港後4か月足らずの1968年5月に佐世保に寄港した米原子力潜水艦ソードフィッシュの異常放射能事件の際と、同年12月の原子力潜水艦プランジャーの寄港時における「激突政治」の退潮を論じ、これら1968年の佐世保における社会運動の推移の事例を、「七〇年代以降の『革新』運動の分化と停滞を予示するものでもあった」³²と位置付けている。平井はさらに、総評や社会党の「革新」政治が、三派全学連やそれに刺激を受けた反戦青年委員会の「行動主義」には期待と躊躇の曖昧な態度に終始する一方、佐世保闘争時に誕生したような市民運動との連携が進められなかったことが「革新」側の「分化と停滞を予示するもの」と戦後革新政治の限界に関連付けた指摘をおこなっている。

1970年代の革新運動の「分化と停滞」に関する平井論文の問題提起は、日本

²⁷ テレビによる佐世保事件報道の重要性については、松本秀雄「佐世保事件とテレビ報道」『現代の理論』1968年4月号、112-115頁を参照のこと。

²⁸ 佐藤首相は、エンタープライズ寄港を「日本人の核アレルギーの克服と防衛意識の向上」の機会だと考えていたという（平井一臣『ベ平連とその時代』有志舎、2020年、119頁）。

²⁹ トーマス・R・H・ヘイブズは、エンタープライズの「船のあまりの巨大さ」を抗議運動が高まった要素の一つととらえている（『海の向こうの火事』筑摩書房、1990年、192頁）。

³⁰ 『アサヒグラフ』1968年2月2日号、14頁。

³¹ 平井一臣「社会運動・市民・地域運動——『エンタープライズ闘争』前後の佐世保を中心に」は、岡本宏編『「1968年」時代転換の起点』法律文化社、1995年に第17章として所収。

³² 同平井論文、452頁。

の戦後政治の変容という中長期の大きなテーマに社会運動研究からアプローチしたもので重要であるが³³、本稿では、福岡のベトナム反戦市民運動参加者の佐世保闘争経験そのものに焦点を当て、より短期の、社会運動固有の歴史的な文脈に位置付ける作業をおこなう。

当時の佐世保闘争をルポした雑誌や週刊誌の記事では、三派全学連を擁護し機動隊と対峙する「佐世保市民誕生」が広範囲に認められている³⁴。こうした理解の前提には、社会運動史や民衆運動史研究においてみられる「実力行使派 physical force」と「穏健派 moral force」という二分法的な発想があり、佐世保闘争の過程でその両者のあいだに相互性や重層性が生成したという理解がある。もう一つの重要な論文は、アメリカ合衆国政府側の史料に大きく依拠したウィリアム・マロッチの論文³⁵であるが、マロッチ論文もまた、「暴力 violence」と「非暴力 nonviolence」の二分法的な図式で、日本における「1968年」の生成に果たした佐世保闘争の果たしたユニークな歴史的意義を論じようとしている。

福岡の「十の日デモ」に集っていた市民によるベトナム反戦運動の佐世保経験を検討する本稿でもまた、彼らの日常に根差す「市民運動」と、三派全学連などの「実力闘争」とのあいだにみられた差異を意識しつつ、両者の相互性生成の諸次元を示すことになる。しかし、本稿では、3名の十の日デモ参加者学生それぞれの佐世保闘争への具体的ななかかわり方を明らかにする中で、相互性や重層性を指摘するだけではなく、多くの論者が前提としている「暴力」を行使する「過激派」と「非暴力」に徹する「市民派」という二分法的な類型設定

³³ 平井論文に対しては、1970年代における革新勢力が異なる運動戦略を採用していれば『革新』運動の分化と停滞を防ぐことができたのだろうかという問いが立てられよう。

³⁴ 「佐世保市民」の「誕生」あるいは「登場」を現場で立ち合って確認した当時の雑誌記事には、たとえば以下のものがある。本誌『週刊朝日』記者団「激動した基地の町の一週間」および井上光靖「三派系全学連は孤立しなかった」『週刊朝日』1968年2月2日号、16-23および24-26頁；[無署名]「革新陣営を超越したプロテスト——佐世保市民の変貌」『朝日ジャーナル』1968年2月4日号、20-22頁；宇佐美承・小島正・小林慶二・西岡正「阻止行動の生んだ連帯と断絶——『群衆』を『市民』に成長させた七日間」『朝日ジャーナル』1968年2月4日号、8-18頁；丸山正和「佐世保闘争」『現代の理論』1968年2月号、152-55頁；(無署名)「佐世保の一週間——“群衆”を“市民”に変えたもの」『月刊総評』1968年3月号、4-6頁；小田実『物』と『人間』——佐世保一九六八年一月『世界』1968年3月号、79-94頁；大森実「佐世保報告——極東の緊張の高まりの中で」『中央公論』1968年3月号、192-220頁；石田郁夫「佐世保市民と全学連」『展望』1968年3月号、58-67頁；田端耕治「原子力艦隊阻止・佐世保闘争の記録」『月刊社会党』1968年4月号、98-107頁；河口憲三「佐世保闘争は何を残したか」『文芸春秋』1968年12月号、134-39頁。逆に、「福岡十の日の会」(ママ)の「市民運動」がトロッキストとつながっているなどの指摘をして共産党の立場から異論を呈したのが奥野正男「佐世保の虚構と真実」『民主文学』1968年4月号、6-29頁、である。また、一月一七日の正午のニュースで流れた機動隊に乱打される学生の映像が佐世保市民および世論に与えた影響について論じているのが松下秀雄「佐世保事件とテレビ報道」『現代の理論』1968年4月号、112-15頁である。

³⁵ William Marotti, 'AHR Forum Japan 1968: The Performance of Violence and the Theater of Protest', *The American Historical Review*, 114(1), 2009, pp. 97-135.

では理解しえない運動主体のあり方により焦点を当ててみたい。個々人の教育・生活史、人間関係に規定されながらも、特定の運動空間における時間経過の中で、上述のようなラベリングでは括り切れない情動や身体感覚が3名の行動主体には励起したように見える。本稿で用いるオーラル・ヒストリーは、そうした運動のマイクロレベルでの運動主体のダイナミズムを明らかにするという効用を持つ。

したがって本稿は、運動の成果や持続性、効果といった側面から評価を下しがちな当事者運動組織研究や社会運動史研究において、あるいはマスメディアの報道や治安当局の記録において、見落とされがちな運動のエネルギーやダイナミズムを明るみに出そうとする試みでもある。それは、「ラディカリズム」や「行動主義」「直接行動」「非暴力直接行動」といった社会運動全般に関わる重要なキーワードが示唆する境界、その内実の問い直しにもつながるだろう。

1-4. 本稿の構成

本稿の各節は以下のような内容となる。第2節では、九州北部に位置し、米軍基地を抱える福岡市、北九州市、佐世保市における市民主体のベトナム反戦運動が佐世保闘争にどのように関わったのか、また佐世保闘争を機にどのような変容を遂げたのかを、東京のベ平連との交渉や連携を確認しつつ述べていく。その際に、福岡市の反戦市民デモ団体である「十の日デモの会」の動向に焦点を当てる。また、北九州市の「北九州反戦市民の会」や、佐世保市の市民運動の佐世保闘争への関わりについても、十の日デモの会も含むゆるやかなベ平連的ベトナム反戦運動のネットワークとの関連と連携に注意を払いながら述べていく。

第3節では、福岡市で市民主体のベトナム反戦運動を担っていた「十の日デモ」に参加していた九州大学の大学院生1名と学部学生2名の佐世保闘争経験を、オーラル・ヒストリー史料（インタビュー史料）を活用して明らかにする。政党や労組などの既成諸組織とも、三派系全学連とも異なる市民的抗議をおこなった若い世代の行動主体の佐世保闘争経験を、当事者自身の主観的な理解をふまえて振り返り、十の日デモに共鳴していた学生たちがとった「市民的行動主義」civic activismの諸相を明らかにしてみたい。取り上げる3名の佐世保闘争経験は、同じ十の日デモの会に関りながらも、多様であり、対照的でもあった。

それぞれの経験には大きな幅がありつつも、佐世保闘争に参加した際に自身が直接に体感した市民的行動主義の経験は、より主体的で行動主義的なベトナム反戦運動を後押ししていく気運を形成した。また、佐世保闘争の過程での各地域の運動当事者同士の交流がなされた結果、十の日デモを母体としながらも十の日デモとは異なる市民的行動主義を展開していくことになる「福岡ベ平連」が誕生することになる。この佐世保闘争の経験を経て、福岡だけでなく、九州の各地で、濃淡はありながらも、市民がより積極的に反戦運動に参画できる受け皿としてのベ平連ないしはベ平連的ベトナム反戦運動が活発化していった。

2. 反戦市民運動団体と佐世保闘争

本節では、九州北部の福岡市、北九州市、佐世保市各地の市民運動が、エン

タープライズ寄港に際してどのような活動を行なったのかをみていく。この3都市をとりあげるのは、ベトナム戦争に直接・間接に関与する米軍基地を有するという共通した特徴があり、それに対する市民の反戦運動の形成が顕著に認められるからである。

ベトナム戦争時代、九州北部に存在する主要米軍基地としては、長崎県佐世保市の佐世保海軍基地、福岡県福岡市の板付空軍基地、そして福岡県北九州市の山田弾薬庫があった。在日米軍基地はいずれも米軍の対アジア戦略に位置付けられて配置されていたが、米軍占領下にあった沖縄諸島を除けば、日本から距離的にベトナムに最も近かったのが九州地方である。とりわけ九州北部には空軍と海軍の主要軍事施設が存在し、それら米軍基地の動静はベトナム戦局の推移に大きく左右された。九州北部のベトナム反戦運動もまた、米軍基地の動静に呼応しながら変容した。

これら3都市——佐世保、福岡、北九州、——におけるベトナム反戦市民運動をみると、その運動の質に変化がみられるようになるのは、羽田闘争というよりも、佐世保闘争が契機であったことは明確である³⁶。佐世保には、九州北部の各都市から日帰り参加が可能だった。九州北部地域の労組組合員はもちろん、学生層も多くが現地佐世保に動員されたし、組織に加わっていない学生たちも自主的に佐世保に向かった者が少なからずいた。

2-1. 福岡市民とエンタープライズ寄港——「十の日デモの会」

福岡市で、毎月10日、20日、30日と月に3度もおこなわれるベトナム反戦定例デモが始まったのは1965年10月10日である。ベトナム戦争の終結まで10年近く続いたと推定される息の長い取り組みだった³⁷。10の日デモが始まった1965年から67年まで福岡におけるベトナム反戦運動については、本稿の脚注7でふれた拙稿を参照いただきたい。中心になったのは九州大学工学部の応用理学教室に所属する数学教官であり、そこに社会党に近い社会科学系教官が参加して始まった。この「十の日デモ」は、1965年から1967年10月8日の羽田闘争あたりまでは、デモの精神的支柱ともなっていた工学部応用理学教室の長老数学教官金原誠の言うところの「福岡市の目ぬき通りをプラカードや横断幕をかかげて歩く、シュプレヒコールもない静かなデモ」³⁸、あるいは「おとなしいデモなら参加できるという人達のおとなしい憤りを結集していく」幅広い福岡市民のデモとして淡々と続けられていた³⁹。

³⁶ 第一次羽田闘争では、たとえば「九州大学からは12～13人の学生が参加し、1人が逮捕され」、11月12日の佐藤訪米をめぐる第2次羽田闘争でも「九州大学からは第1次と同様、12～13人が参加し、6人が逮捕された」という状況だった（九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史 第2巻：通史編Ⅱ』2017年、307頁）。羽田闘争の現場に福岡から参加した者は学生であれ労働者であれ、ごく限られていたことから分かるように、九州からみれば羽田闘争は遠い東京での出来事であったというべきだろう。

³⁷ 最後の十の日デモがいつ行われたのかは、いまのところ明らかになっていない。

³⁸ 金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」（1967年執筆）、金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』1972年、42頁。

³⁹ 『アサヒグラフ』1967年12月8日、66頁、「福岡県 ベトナム反戦十の日デモの会 金原誠」の談話記事より。

この十の日デモの参加者たちは、1968年1月の佐世保闘争にどう取り組んだのだろうか。十の日デモの会として何事かをする際には、定例デモのあとに開かれていた「ティーチイン」で議論をして決めていた。佐世保へのエンタープライズ寄港阻止闘争に際しても、1968年最初のデモ（1月10日）のあとのティーチインで取り組みを決めたという⁴⁰。そこでの申し合わせは次の3つであった。

- (1) 入港中は福岡市で連日デモをやる
- (2) 有志の名で佐世保市民に訴えるビラをつくり、米兵向けの〔東京の〕ベ平連のビラとともに現地へいく人がまく
- (3) それ以外は各人の自由意思で思うままにやる⁴¹

福岡の十の日デモの会は、東京のベ平連と連絡を取りつつ、また独自に会議を重ねつつ、エンタープライズ入港阻止行動の準備にとりかかっていた。十の日デモの世話役の一人でもあった九大助教授の倉田令二郎は、エンタープライズ入港日1月19日（金）に、東京のベ平連から来た代表の小田実や事務局長の吉川勇一、中核派の丸山淳太郎（当時横浜国大4年）らとともに記者会見をおこなって自分たちの抗議行動について説明した⁴²。

記者会見では、寄港期間中、エンタープライズ乗組員に対する脱走呼びかけを含む直接反戦行動を継続しておこなうことが発表され、19日の記者会見後には外人バー街を車で回っての呼びかけをおこない、翌20日には船をチャーターしてエンタープライズ周辺で直接の呼びかけをおこなうとした。20日から配られるビラにはイントレピットの4人の脱走兵のメッセージや東京のベ平連事務局への連絡方法が記され、「反戦青年委員会や倉田令二郎九大〔助〕教授らが世話役の十の日デモ（だれでも任意に参加できる毎月十日の福岡、北九州市での市民デモ）のメンバーが佐世保市内で米兵に渡し、できれば話しかける」⁴³と発表されたと、新聞は報道している。

アメリカ合衆国政府も、米兵の脱走を促すベ平連活動を注視し、日本側当局の協力も得ながら情報収集に努めていた⁴⁴。ビラまきや街宣車による米兵への呼びかけを海軍住宅施設地域や外国人バー街、海軍基地正門でおこなうとした小田実の記者会見での発表や、配布ビラの内容、ベ平連への協力者についても、

⁴⁰ 倉田令二郎『『十の日デモ』と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、95頁。

⁴¹ 同上。

⁴² 山田俊雄が救援活動の資金集めのために1969年末に出した「P通信」には、「倉田〔令二郎〕先生は、小田実、丸山ジュンタロウ（中核〔派の書記局員〕）とともにベ平連・三派・十の日デモ共同記者会見なるものに出席」と記されている（山田俊雄「マル秘 阿P九大闘争記 P通信」no.1、1969年11月14日）。ベ平連運動に最も強い関心を持っていたのは中核派であったが、この記者会見への同席にもその姿勢がうかがえる。

⁴³ 『朝日新聞』西部版、1968年1月20日朝刊。

⁴⁴ Telegram 191744Z, 'Defector SITREP Four', January 19, 1968, DEF 7 JAPAN-US, in Reel 3, *Confidential U.S. State Department Central Files, JAPAN 1967-1969*. 警視庁は脱走兵が出る可能性に備えて、2名の巡査部長をベ平連に張り付けて監視していた。

逐一本国に伝えていた⁴⁵。

吉川事務局長自身の記述では、福岡や佐世保など九州現地の運動団体や市民・労働者の役割は、東京ベ平連の計画した行動を補助的に支援するものでしかなかったように描かれている。

「……相談の結果、私たちは宣伝カーを借りて外人バー街と基地正面で、それにチャーターしてエンタープライズの周辺で、米兵に訴える活動をし、ビラは地元や福岡の10の日デモの会の人びとの協力を得て直接手渡すことにした。

長崎と佐世保の地区労や反戦青年委員会をはじめ全国実行委〔社会党系の佐世保闘争全国組織〕の人びとの好意的なはからいでベ平連に宣伝カーが一台提供された。……」⁴⁶

しかし、十の日デモの会が作成したビラの内容とその配布活動には、小田や吉川ら東京のベ平連の志向とは異なる独自の目的があった。米兵への脱走の呼びかけを主とした東京ベ平連のビラとは異なり、十の日デモが独自に作成したビラは佐世保市民への訴えに重点が置かれていた⁴⁷。ビラの作成に関わった倉田によれば、それは次のような内容のものだった。

- (1) エンブラ艦隊入港は佐世保市民がなめられている証拠であることを考えてください
- (2) 米兵に出食わしたら脱走や反逆をすすめてください
- (3) 学生を警官の暴行から守ってやってください⁴⁸

とくに(3)は、九大が拠点となっていた十の日デモらしい観点からの訴えである。十の日デモの会の平井孝治も、十の日デモの会の「有志の名で作った市民むけのビラを、脱走を呼びかけるベ平連のビラとともに、まくことにしていた」と述べている。そこには、エンタープライズの寄港反対のメッセージとともに、「三派全学連をあの行動に駆り立てる背景と動機を考えると共に、若い純な彼らが十数倍の警官によって殴られたり、殺されたりするのを、あらゆ

⁴⁵ Telegram 201523Z, 'Defector SITREP Five', January 20, 1968; Telegram 211118Z, 'Defector SITREP Six', January 21, 1968; and Telegram 221202Z, 'Defector SITREP Seven', January 22, 1968, *ibid.* 協力者として、「福岡・十の日デモの会」、その関連団体として九州大学の医学部生の「ベトナム反戦に立ち上る会」と「ベトナム反戦をすすめる会」、さらには広島で平和活動をしていたレイノルズ夫妻らの名前が挙げられている。原水協や原水禁が、米兵に街宣車から英語で反戦を呼びかけたり、米兵に英文の反戦ビラを配布する活動を行っていたことも報告されている。

⁴⁶ 吉川勇一「現地レポート Will You Consider? 水平に脱走のすすめ」『ベ平連ニュース』29号、1968年。

⁴⁷ 米国務省の電信報告には、十の日デモの会が配布した日本語のビラには米兵に脱走を呼びかける文言は皆無だったとのコメントが記されている。Telegram 211118Z, 'Defector SITREP Six', January 21, 1968, DEF 7 JAPAN-US, in Reel 3, *Confidential U.S. State Department Central Files, JAPAN 1967-1969.*

⁴⁸ 倉田令二郎『「十の日デモ」と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、95頁。

る手段で守ろう」と訴えられていた。

ビラ配りには、「九大・十の日デモの会」の学生15人が参加したと『読売新聞』（西部版）は報道している⁴⁹が、実際の配布者は十の日デモ参加者だけではなかった。このビラは、5千枚が刷られ、十の日デモ参加者と月2回のデモを当時おこなっていた「北九州ベトナム反戦の会」からの参加者、そして佐世保の市民参加者、あわせて100名（延べ人数）によってまかれたと倉田は述べている⁵⁰。

さらに平井孝治によれば、「抵抗の意志のない学生や検束した学生に対して、リンチを加えないよう」、「胸より高く持つてはならないと規定した、警棒使用規則にしたがうよう」など訴える機動隊員向けビラも作り、19日に佐世保橋で機動隊員にまいたという⁵¹。

一方、十の日デモの会は、福岡市内でも、エンタープライズの佐世保入港前後の8日間にわたり連日のデモを敢行した。十の日デモの中心的運営実務者の一人だった九大教官の山田俊雄は次のように伝えている。

「……K・S・I²及び金原先生のこのころの活やくは目ざましいもので、エンタープライズ寄港中は福岡市で10の日デモをとくに15日～22日連日行う（多いときは三百位）。10の日デモは、ノンセクトの学生、市民、センセ〔先生〕の連絡センター、救援活動などをやって来た。ここでとくに親しくなったのは、九大医学部学生諸君とK・S・I。以後これは今にいたるまでつづく。」⁵³

十の日デモへの参加者には、現地に出かけて負傷者の「救護活動」に従事した者もいた⁵⁴。そして、九大教官の「連絡センター」的な役割、すなわちメッセージの仲介をした学生もいたということになる。山田自身も佐世保と福岡を「行ったり来たり」していたという⁵⁵。

2-2. 十の日デモの会と「北九州ベトナム反戦の会」

佐世保闘争におけるベ平連のビラ配りには、福岡の十の日デモの会とともに、「北九州ベトナム反戦の会」が加わっていた⁵⁶。まず、北九州ベトナム反戦の会の成り立ちを簡単に確認しておこう。

⁴⁹ 『読売新聞』西部版、1968年1月20日朝刊。

⁵⁰ 倉田令二郎『『十の日デモ』と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、95頁。

⁵¹ 平井孝治「激突の間に立って——佐世保の三日間」『思想の科学』（第五次）、1968年4月号、62-63頁。

⁵² K・S・Iというのは、九州数学者陰謀会議の略である（山田俊雄オーラル・ヒストリー、2008年2月28日）。

⁵³ 山田俊雄「マル秘 阿P九大闘争記 P通信」no.1、1969年11月14日。

⁵⁴ 倉田令二郎『『十の日デモ』と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、96頁。

⁵⁵ 山田俊雄オーラル・ヒストリー、2008年2月28日。

⁵⁶ 北九州ベトナム反戦の会からは特に桜木徹郎が協力したことが、吉川勇一「現地レポート Will You Consider? 水平に脱走のすすめ」『ベ平連ニュース』29号、1968年、1頁に記されている。

1967年3月、「北九州ベトナム反戦行動委員会」の名で、「自由にそして自発的に個人の認識と要求とを掲げ、その実現の方法を創意しながら」結集して行動を起こしてほしいと呼びかけるビラが作られている。この会の中心になっていたのは、社会党系の文化組織である国民文化会議に属する松本昭文や、思想の科学研究会会員の今村修ら、北北九州市在住の文化人たちだった。この会が「さして行動的でもない10名たらずの団体」だったというのは、北九州市立大学（以下、北九大）の学生、桜木徹郎の当時の評価である⁵⁷。桜木ら「4名の自称 北九州ベ平連」が合流し、「北九州ベトナム反戦の会」として発足した。

合流はしたものの、北九大ベ平連のメンバーと、年長者の社会人も含めて構成されていた「北九州ベトナム反戦の会」の活動にはかなりの落差があったようである。合同した後も、以下に述べていくように、急進的な街頭行動をおこなう際には「北九大ベ平連」の旗の下で学生たちが独自の活動を展開していった。

「北九州ベトナム反戦の会」の第1回のデモがおこなわれたのは、1967年6月3日（土）だった。参加者は30名、ほとんどが学生で社会人は2名のみで、35分ほど繁華街を歩いたという。北九州ベトナム反戦の会は、大学人ではない在野の北九州文化人たる「大人」に、北九大学生や高校生が参加した組織だったが、桜木は社会人の少なさに「なんとかしないと」と書かずにはいられなかった⁵⁸。

「北九州ベ平連」とも呼ばれた⁵⁹北九州ベトナム反戦の会は、毎月第1、第3土曜日を定例デモの日とし、17時30分、小倉区役所前から出発して小倉の目抜き通り一帯を歩いた。そして、新聞では、1967年の夏ごろから「北九州市小倉区でも、10の日デモの小さな支流がはじまった」と報道されていて⁶⁰、福岡の十の日デモの例に続いたものとみなされることもあった。たしかに、両者は連絡を取り合って、交流をおこなっていた。1967年12月16日、北九州ベトナム反戦の会は23人が参加した第14回の定例デモをおこない、十の日デモの金原誠と山田俊雄を交えて、小倉労働会館で「今年の反戦運動の総括と展望」と題した座談会をおこなった⁶¹。そして、その一月後の佐世保闘争では、ともに佐世保で脱走を呼びかけるビラを米兵にまいたのである。佐世保闘争後も連絡を取り、相互交流もことあるごとになされた⁶²。

⁵⁷ この合流の経緯やこの節での引用は、立教大学社会共生研究センター所蔵の吉川勇一資料に所収されている、桜木徹郎から東京のベ平連に宛てた手紙〔1967年6月4日執筆〕からのものである。3月時点のビラは、北九州ベトナム反戦行動委員会発起人一同「よびかけ ベトナム反戦を行動で！」（ビラ）、1967年3月。6月の合流時点でのビラは、北九州ベトナム反戦の会「よびかけ ベトナム反戦を行動で！」（ビラ）、1967年6月。6月時点のビラには、連絡先として、今村修、桜木〔徹郎〕、松本昭文、重田すえの、前田光弘の名前が掲載されている。両ビラとも吉川勇一資料所蔵。

⁵⁸ 同上。

⁵⁹ 『週刊アンボ』3号、1969年12月15日、頁記載なし〔3頁〕には、この呼称でデモ予定が掲載されている。

⁶⁰ 「静かなるデモ——この断絶 民主主義⑧」『朝日新聞』西部版、1968年1月10日朝刊。

⁶¹ 北九州ベトナム反戦の会『かいほう』3号、1968年3月、頁番号記載無し。

⁶² 一年後の68年12月14日にも、福岡ベ平連は「北九州ベ平連と交流会」を持って

「月 2 回の定例デモを中心にして 東京その他各地のベ平連や博多の 10 の日デモなどと連絡をとりながら独自の反戦運動をすすめています」⁶³というのが、佐世保闘争後まもなくの時点での北九州ベトナム反戦の会の地元市民に向けた自己紹介だった。その後、福岡と北九州のベトナム反戦運動は、米軍山田弾薬庫への弾薬輸送阻止闘争——すわり込みによる非暴力直接行動——にも参加していくことになる⁶⁴。

2-3. 十の日デモの会と「佐世保ベ平連」および「一九日市民の会」

佐世保闘争と東京から来たベ平連ということで最もよく知られているエピソードは、次のような「市民の自発的参加」の展開であろう⁶⁵。

「……代表格の作家小田実さんと現地入りした吉川さんの心中は、「福岡十の日デモの会」の会員たちの助けを借りて米兵への脱走をすすめるピラをまき、船でエンタープライズのまわりをデモって、しかるべき時期に帰京しようということだった。

ところが、佐世保に着いたその日から「なにかお手伝いしたい」という学生や市民の絶えまない申出にとりかこまれてしまう。「不特定多数の人たちと行動をとる」この日 [1月21日(日)] のデモは、こうした雰囲気によって小田さんが考え出したものだった。七、八人で佐世保駅前をスタートしたデモは、市内の繁華街で一時は一〇〇人にまでふくれ上がった。幼児を連れた若夫婦、学校帰りの女子高校生、クリーニング店員、会社員……。

「こうした市民の自発的参加は、安保のとき以来です」。元来人のいい吉川 [勇一] さんは声をつまらせた。」⁶⁶

こうして、小田実と吉川勇一の東京のベ平連との直接の出会いに触発されて佐世保ベ平連は誕生した⁶⁷。

佐世保闘争から生まれたのは佐世保ベ平連だけではなく。佐世保では、ベ平連とは別に「一九日市民の会」も結成されている。会の母体となったのが

いる。前年同様に、一年間の活動をともに振り返る機会を持ったのではないかと推測される。(『ベ平連通信ふくおか』第5号、1968年12月15日号、19頁)。

⁶³ 北九州ベトナム反戦の会『かいほう』3号、1968年3月、頁番号記載無し。なお、この機関誌は坂口博氏所蔵のものを参照させていただいた。記して感謝します。

⁶⁴ この闘争についてはとりあえず、市橋秀夫「写真史料が伝えるベトナム反戦運動——1968年北九州反戦青年委員会弾薬輸送阻止闘争の記録」『日本アジア研究』18号、2021年、93-146頁を参照のこと。

⁶⁵ 佐世保闘争と佐世保市民の関係については、その複雑さを指摘した平井一臣『ベ平連とその時代——身ぶりとしての政治』有志舎、2020年、118-29頁を参照のこと。

⁶⁶ 宇佐美承・小島正・小林慶二・西岡正「阻止行動の生んだ連帯と断絶——『群集』を『市民』に成長させた七日間」『朝日ジャーナル』、1968年2月4日号、11-12頁。

⁶⁷ 「電気屋さん、大学生、女子高生、主婦の四人が、世話人を引き受けた」かたちで、佐世保ベ平連を作る話になったという。宇佐美承・小島正・小林慶二・西岡正「阻止行動の生んだ連帯と断絶——『群集』を『市民』に成長させた七日間」『朝日ジャーナル』、1968年2月4日号、11頁。

「佐世保文化人会議」という革新系の文化人組織であった。文化人会議とは別に、革新団体や婦人会で構成される兄弟団体「佐世保市民会議」があったが、文化人会議のほうは具体的な行動力は弱かったという。その文化人会議が、佐世保闘争を機に「一九日市民の会」へと「脱皮した」のである⁶⁸。

一九日市民の会の発足を牽引した佐世保ペンクラブ会長の矢動丸広(やどうまる・ひろし)は、佐世保闘争後の『朝日ジャーナル』に「佐世保市民誕生す」と題された文章を寄稿している。矢動丸は、佐世保闘争で「飼いならされた市民」が「檻を破って出られることを学び取った」と述べ、「野次馬から生れ変わった市民」の行動を持続させるべく、佐世保「市民会議の下部に、個人加入の『一九日デモの会』をつくる」と宣言していた⁶⁹。

一九日市民の会は、エンタープライズが入港した19日に毎月デモをする市民の会で、1968年2月19日に第1回のデモをおこなっている。その第1回のデモには、佐世保ベ平連から28名、佐世保女子高の教員4名、県立国際経済大学の教員と学生、そして福岡十の日デモの学生も2名参加したという⁷⁰。

ここから分かるように、「佐世保ベ平連」と「一九日市民の会」は定例デモ形式を共有し、メンバーも少なからず重複していた。ただし、佐世保では北九州市とは異なり、地域の文化人グループで構成される一九日市民の会と、佐世保ベ平連とは合流せず、別々の集団を維持した。一九日市民の会は若干名の世話人の合議制で企画を決め、会員制をとり、発足後1年間で、会員名簿には500名の名前があった⁷¹。

佐世保闘争ののちの福岡十の日デモの会は、佐世保ベ平連や一九日市民の会のデモに参加するなどのかたちでの連携を持った。この関係は、十の日デモから福岡ベ平連が誕生した後も続いた。

以上みてきたように、佐世保闘争を通じて十の日デモは、北九州ベトナム反戦市民の会と連携し、佐世保闘争から生まれた佐世保ベ平連および佐世保一九日市民の会と行動を共にする機会を得た。しかし、十の日デモの会の参加者のあいだでも、佐世保の現地に行き、東京のベ平連や北九州のベ平連と連携して十の日デモの会としてビラをまきデモをした者もいれば、本稿3節で述べるように、十の日デモの会以外の仲間と現地に行ったり、個人として現地に出かけて行って活動したものもいる。佐世保にはいかに、福岡市内でデモやビラまきの活動をした者も少なくない。

3. 十の日デモ参加学生の佐世保闘争経験——3人の事例

本節では、十の日デモの参加者で佐世保の現地に出かけていった九州大学の大学院生1名と学部学生2名の計3名を取りあげ、彼らがどのような佐世保

⁶⁸ 力武伊佐夫「佐世保市民『無言のデモ』——一九日市民の会・ここに誕生」『朝日ジャーナル』1968年3月17日号、97頁。

⁶⁹ 矢動丸広「佐世保市民誕生す——中で考えたこと」『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、98-100頁。

⁷⁰ 力武伊佐夫「佐世保市民『無言のデモ』——一九日市民の会・ここに誕生」『朝日ジャーナル』1968年3月17日号、100頁。

⁷¹ 力武伊佐夫「対決の姿勢——市民運動のありかた」19日市民の会編『市民運動の出発 佐世保・1968.1.19』社会新報、1969年、83頁。

闘争を経験したのかを明らかにする。

3-1. 平井孝治の佐世保闘争経験にみる非暴力直接行動と「市民」

佐世保闘争でマスメディアの注目を浴びた九大大学院生がいた。倉田や山田らよりかなり若い、団塊世代よりやや年長の戦中生まれの平井孝治である。1967年、九州工業大学から九州大学大学院工学研究科に進学していた。

平井は1942年京都生まれで、佐世保闘争時には25歳になっていた。小学生時代から学生たちの街頭デモのあとをついていった経験を持つ早熟な子どもだった。リベラルな校風で知られる進学校府立鴨沂（おうき）高校に入学して社研に入り、1年生2学期からは早くも学外の学生運動にも参加するようになっていた。60年に入って間もない高校2年生の終りには「安保阻止実行委員会」を結成し、鴨沂高校のデモや集会を取り仕切る立場に立っていた。早熟な運動経験を持つ平井であったが、九州大学大学院工学研究科に入学した際には、工学部所属の数学教官たちが十の日デモなど独自の反戦運動を担っていることはまったく知らなかったという。平井は十の日デモの運動を「手ごろ」と感じ、十の日デモには「特段のことがない限り全部参加していた」という⁷²。

そんな平井だったが、佐世保闘争さ中の1月21日にはもともと運動族たる平井の資質が刺激されたのか、佐世保闘争で集まっていた個々の市民をひとつの方向性をもった群衆へとまとめあげることになる演説を打つことになった。この日は日曜日だったこともあってだろう、非常に大勢の労働者、市民が群衆となって集まってきた。平井がおこなった演説のせいで、群衆となった市民が機動隊に対峙することになり、平井の行動は、翌日朝刊の『朝日』、『毎日』、『読売』の各新聞の西日本版に「九大大学院生」として報道されて注目をあびた。4,000人の市民が集まっていたとする『読売新聞』は、次のように報道している。

「この日は、小雨や小雪がちらつく寒さだったが、見物人は身動きもせず、デモ隊がくるのを待っていた。その間、長崎県立国際経済大のデモ隊が二回ほど橋まできてジグザグ・デモを繰り返すと、見物人たちのなかから盛んな拍手がわく。また九大大学院生（二五）の「学生デモを救おう」という呼びかけに呼応した見物人の約二百人が三、四回と橋のなかにはいろうとしたので警官隊ともみ合い、三派全学連の姿が見えないうちから興奮状態となった。

こんなことは、羽田でも、その前の安保騒動のときにも、まったく見られなかったことだ。」⁷³

『朝日新聞』（西部版）の報道は平井の行動を実名で次のように報道した。

「市民のみなさん、警官が暴力をふるうようなことがあったら、学生を守ってください。遠巻きにする市民に向って九州大学大学院生の平井孝治（二五）が呼びかけた。二十一日午前十時十五分、佐世保橋のC Pビル

⁷² 平井孝治オーラル・ヒストリー、2011年9月20日。

⁷³ 『読売新聞』西部版、1968年1月22日朝刊。

付近。反代々木系構革派〔構造改革派—筆者注〕の学生三十人がジグザグデモで警官隊の正面に来たとき。

平井君は福岡市の「十の日デモ」の会員。学生のこん棒戦術には疑問を感じるが、警官の暴力はひどすぎると思って、訴えにやってきたのだという。……」⁷⁴

平井自身は当時を次のように回想している。

「えーとね、僕が演説し出したんですよ。言ってる趣旨はむちゃくちゃ簡単で、当時機動隊と三派全学連等とが対立するんですね。そこで私がエンタープライズの話と、学生たちをサポートしようみたいな形の演説をぶつんです。そうしたら「そうだ、そうだ」とわーっとなって、あのとき市民が何百人と機動隊員のいるところへ押しかけていくんです。扇動じゃないんだけど、これは、僕はびっくりしましてね。」⁷⁵

三派系全学連が来る前の段階のこの平井の演説に対して「一人の初老の紳士が学生が角材や石を持ってデモするのが悪いといった意味の」発言があり、それをきっかけに市民同士の街頭討論が始まり、その結果、機動隊に過剰警備を止めるよう交渉しに行くことになったという。平井は「私はこんなにまで市民の人達が行動するとは夢想だにしていなかったので、むしろあわててしまった」という⁷⁶。

平井の予想に反して、人びとは佐世保橋を通せと機動隊を押し続けた。平井は、このままでは近くのホテル側に「待機している部隊〔機動隊—筆者注〕がやって来るのは目に見えていた」と判断、人びとにこれ以上押さないことを納得してもらって機動隊長と交渉を始めたという⁷⁷。『毎日新聞』（西部版）は昼前の話として、そのときの様子を次のように報じている。

「激突が予想された佐世保橋ぎわの群衆は、同日昼前には七、八千人にふくれあがった。「学生の突入必至」という情報で警官隊は橋のたもとに阻止戦を固める。約二百人の市民が「天下の公道だ。なぜ通さぬ」「乱暴するな」と無表情の機動隊員に抗議する。「通せ、通せ」と後ろから押す。「押さないでください」最前列にいた“福岡十の日デモの会”の九大大学院生〔＝平井孝治〕がスピーカーで訴える。

スピーカーを機動隊に向けなおして「警棒で学生や市民をなぐらないでください。警棒使用則で禁じられているはずですよ——」これを聞いた機動隊の責任者はやや興奮気味。「学生がなぐりかかってこないかぎり、警

⁷⁴ 『朝日新聞』西部版、1968年1月22日朝刊。

⁷⁵ 平井孝治オーラル・ヒストリー、2011年9月20日。ここで語られている「何百人」とは「二百人ぐらい」（平井孝治「激突の間に立って——佐世保の三日間」『思想の科学』（第五次）、1968年4月号、64頁。）だったようである。

⁷⁶ 平井孝治「激突の間に立って——佐世保の三日間」『思想の科学』（第五次）、1968年4月号、64頁。

⁷⁷ 同、64-65頁。

棒は使いません」とスピーカーでやり返す。」⁷⁸

こうして「サカイ機動隊長」から言質をとった平井は、次のように考えてその場を收拾した。

「私はもちろん機動隊がそんな約束を守るとは思っていたのではない。がそこに集まって来た市民に、約束させた内容を知らせ、さらに彼等がそれを守るかどうか見届けようと呼びかけて、当面の不測の事態を避けた。」⁷⁹

むろん、午後になり、実際に全学連が来て衝突となった際には「ハンドマイクなどは何の役にも立たないことがわかった」。その後の平井はどうなったのか。午後に入ってから平井の行動を『朝日新聞』は次のように見届けていた。

「午後二時すぎ、三派系の学生が警官隊に突込んだ。平井君は叫んだ。「君たち角材を捨てろ。そうすれば警官も乱暴しない」。学生が「そんなことがあるものか」とわめきかえして突込んだ。衝突した双方の間に飛込んで「やめんか、やめんか」と手を広げた平井君の顔に警官の防石たてがあたった。オーバーもなく、ヘルメットもなく、放水をまともにあびて、平井君は人の波にのみこまれた。」⁸⁰

『読売新聞』の記事では、学生たちが来てからの市民の動きを次のように報じている。

「学生が動く、横の見物人も動く。「やれやれ、全学連」「突き進んで警官隊を追い返せ」と無責任なかけ声をかける人さえある。学生たちと一緒に、石を警官隊に投げつける見物人もいた。見物人たちも、学生たちと一緒に、橋の中を行ったり来たり。警官が制止しようとする「おれは市民だ。ここにいるのがなぜ悪い」と危険も忘れて“権利”を主張する。」⁸¹

平井とともに、というよりも、平井の思惑を超えて動いた市民とは誰だったのだろうか。総評のオルグで、佐世保闘争の米原子力艦隊寄港阻止全国実行委員会事務局次長だった八木寛作は、佐世保での「市民」の形成について次のように当時ふり返っている。

「……一七日、一八日と日を追うに従い、野次馬は群衆となり、群衆は市民集団となり、この市民集団は、二一日には寄港に反対し、反対勢力と連帯感情をわかちあう市民勢力にまで発展した。松崎公園での二万人集会が開会される二時間も前から会場周辺につめかけ、三派全学連の入

⁷⁸ 『毎日新聞』西部版、1968年1月22日朝刊。

⁷⁹ 平井孝治「激突の間に立って——佐世保の三日間」『思想の科学』（第五次）、1968年4月号、65頁。

⁸⁰ 『朝日新聞』西部版、1968年1月22日朝刊。

⁸¹ 『読売新聞』西部版、1968年1月22日朝刊。

場をヘルメット、棍棒で阻止しようとする民青や代々木系全学連のピケを「何故いっしょに闘わないのか」とののしり、棍棒をとりあげ、デモが出発すると、駆け足で大挙してコースを先廻りして、機動隊に「市民の道をあけろ」と要求し、反戦青年委員会や常駐行動隊を先頭とする全国実行委員会部隊が、三派全学連の機動隊のはさみうちにあつてぜんめつする寸前に到着するや、歓声をあげて声援をおくり、右翼の挑発に怒つてはその宣伝車をとりかこみ、赤尾敏をタイホさせ、負傷した学生を機動隊の検束からかばい、中には自宅に連れ帰り看護する、街頭署名には積極的に応じ、カンパには五千円札から一万円札までもヘルメットにほうりこむ。……」⁸²

一方、平井は、佐世保闘争での自分の役割についてまとめた文章の末尾に、「最後に市民市民といつても、その大半はSSK[佐世保重工業株式会社]の労働者や、或は中小企業の未組織労働者であった点を留意しておきたい」⁸³と記している。これは興味深い記述である。また、長崎の最大規模企業である三菱重工長崎造船所の場合、三派系学生たちを守る行動に出たのは、動員された集会和デモに参加した第一組合所属の労働者ではなく、動員の声さえかからなかった第二組合員だったという週刊誌の以下の取材報道もある。

「この日はたまたま日曜日であつた。第二組合員のなかで、勝手に佐世保橋まで出向いて「おれは一市民だ」と名乗っていた人たちがいるのである。「市民」はそういうところで成立していた。」⁸⁴

これも、佐世保闘争時のいわゆる「群衆行動」を考える際に、重要なポイントのように思われる。労働組合に動員されてやってきた組織された労働者は、内面的にもデモ行動の面でも、あらかじめ組織されたうえでやって来ているがために、勝手に動くことは難しかった。事前の取り決めが内面化されてやって来ているがために、闘争現場の状況に煽られながらも、刷り込まれ内面化した規範を逸脱し隊列を自ら解除して「勝手に動く」には大いなる困難があつた、と想像される。そうした組織された「労働者」身分から放たれたかたちで現場に来ることのできた「市民」としての「労働者」が、現場の渦に「勝手に」身を投げ込むことができたのではないだろうか。この市民・労働者の群衆行動は、佐世保闘争の紛れもない主役であつた三派全学連の実力突破行動とはおおいに異なるものでもあつた。

3-2. 梅村浄の佐世保闘争経験

医学部の仲間とともにデモに参加していて、平井が演説していた現場を目撃していた九大医学部女子学生梅村浄は「放水があつたりとか、たくさんの機動隊がいる中に、そう、やっぱり、市民の力ということを感じたということです。

⁸² 八木寛作「佐世保闘争・激動の一週間」『月刊社会党』132号、1968年4月、94頁。

⁸³ 平井孝治「激突の間に立って——佐世保の三日間」『思想の科学』（第五次）、1968年4月号、65頁。

⁸⁴ 『反戦市民』ここに誕生 長崎『朝日ジャーナル』1968年3月17日号、26頁。

…(中略)…人びとの声が外に出てきた、ということ強く感じました⁸⁵という。「平井さんが〔市民の人びとに向って〕話しかけられているところを聞いたというか、文言を覚えているわけでもないけれども、それによって事態が動いた、ということは感じましたね。だから、人びとが動くときのメカニズムといたらいいのかな。ほら、たくさんの人の気持ちがあるんだけど、彼の呼びかけによってそれが集中していく、そこに、行動が、というようなことを感じましたね」。梅村は、自分の記憶がその後の報道などの情報で上塗りされているかもしれないと自重しつつも「すごいものを見たね」という感慨を持っている。

梅村は、1963年に九大医学部(6年制:教養部2年+医学部4年)に入学しているので、佐世保闘争の1968年1月には医学部の3年生の終りを迎えていたことになる。梅村が十の日デモに参加していたのはそれ以前からのことで、同じく十の日デモに参加していた社青同系の教養部自治会主導部の医学生グループとは別参加だったという⁸⁶。いつどんな理由で十の日デモに行くようになったのかは記憶にないが、「また十の日が来たから行こうね」「今日行こうか。ああ、うん、予定がないから行くよ、的な感じ」で行っていたのではないかと記憶している⁸⁷。十の日デモは「のんびりムード」だったが、通常のデモコースとは違う、市内大濠公園にあるアメリカ領事館までデモしてシュプレヒコールで終えた十の日デモがあったことも覚えている。こうして梅村は、十の日デモには「たぶん、ずうーっと行ってたと思います」と回想する。「何か、強い意識があったのかは分からないけれども、やっぱり、行かなきゃいけない気持ちがあったんでしょね」。

2年間の教養部学生生活を終えた梅村は、65年に馬出(まいだし)にあった医学部キャンパスに進学、医学部の1年生となった。医学部学生サークルの「社会医学研究会」に入会し、三井三池の炭じん爆発(1963年11月9日)の被害者である一酸化炭素中毒症患者の聞き取り調査にも参画した。インターン制度の廃止を求めて1966年に全国結成された青医連(青年医師連合)⁸⁸の寄り合い場所である「青医連ルーム」にも出入りするようになった。九大の青医連はセクトに牛耳られることはなかったが、十の日デモにも参加していた社青同系の上級生がリーダーシップをとっていた。梅村もやがて青医連のリーダーシップを取る側に回ることになるが、セクトには属さない活動家だった。

ベトナム戦争への関心ということでは、マスコミの影響もあったと梅村はふりかえる。ベトナムの人を直接に知っているわけではなかったが、1965年の北爆以降は、つねにベトナム戦争に関する報道や写真に接する機会があり、そのことは医学生でもあり長女でもある自分の生き方を模索している真っ只中の若い梅村をさまざまに触発した。「そのとき私は20代の前半ですよ。だか

⁸⁵ この段落の梅村の発言は、梅村浄オーラル・ヒストリー、2021年8月5日。

⁸⁶ 社青同の自治会学部生グループのベトナム反戦活動や十の日デモへの参加については、市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動の一研究——福岡・十の日デモの時代(3)」『日本アジア研究』13号、2016年を参照のこと。

⁸⁷ ここでの梅村浄の発言の引用部分は、すべて梅村浄オーラル・ヒストリー、2021年8月5日。

⁸⁸ 青医連については、青医連中央書記局編『日本の大学革命6 青医連運動』日本評論社、1969年を参照のこと。

ら、自分の未来は見えてなかったんだけど、でもなにか、ベトコンのみなさんといってもいいんだけど、そこに住んでいるベトナム人の方たちには、はっきりとした闘いとるべき未来があるというふうにみえたんですね。あまりにもそれは悲惨な状況であったとしても、この人たちはマスとして、共通の目標があって、進んでいっているんだけど、なにかこの日本でウジャウジャしている自分との落差を感じているときもありました。ずーっとそうだったわけじゃないと思いますけど。」

1968年8月にソ連が介入して圧殺したチェコスロバキアの「プラハの春」に関する集会で司会をしたことも記憶にあり、「そのときはそれなりに、なんか励起された状態」「運動にコミットした状態にあった」と回想する。工学部応用理学教室の倉田研究室に出入りし、倉田令二郎や倉田ヒデ子とも親交があった梅村は、倉田夫妻や山田俊雄といった十の日デモを担っていた「先に行く人たちが愉快で、面倒見がいい人たちだったので、続いたでしょうね、私たち学生も。セクトの人たちはおいといて、私たちのグループについては、大きかったと思います」という。

社会意識を強く持っていたと思われる梅村は、「どうして私たちは佐世保に行くのか」についてある下級生と話をしたことを覚えている。政治状況の分析やベトナム戦争云々ということよりも、「そこで行なわれていることを実際に見なくては理解できないから、まあ、とにかく行くみたいな感じ」だったという。現地に行ってデモにも参加した梅村は、平井孝治がデモの現場で市民を指揮することになる現場にも立ち会うことになった。梅村によれば、自身を含め、おそらく青医連ルームに出入りしていた医学生10名以上が現地に赴いたのではないかという。医学部生は現地で救護活動にもあたった⁸⁹。そんな関係の中で、佐世保闘争後の68年5月に結成されることになる福岡ベ平連の初会合でも、医学部の窓口として、梅村の名前が本人の知らないところで挙がることになる⁹⁰。

3-3. 平嶋康昌の佐世保闘争経験に見る「個人」で動く反戦運動

平井のような運動歴の長い年長の院生とも異なり、また、医学部というコミュニティの文脈があった梅村とも異なり、まったくの一人で、組織や運動とは一切関係なく十の日デモに参加していた学生が平嶋康昌だった。十の日デモの最も早い時期から参加していた平嶋は、65年入学の理学部数学科の学生である。1947年2月生まれの平嶋は、60年安保の影響があったのか中学時代に天皇のお召列車歓迎を準備していた学校を批判したり、近所に住む九大の医学生が全学連で活動しているのを聞いたりする中で、自分も大学生になったらデモに出るんだという気持ちは抱いていたという。九大に入学した平嶋は、学生のデモがあるとまったくの個人として誰ともつるむこともなく、最初から一人で参加していた。

⁸⁹ 倉田令二郎『『十の日デモ』と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、95-97頁。

⁹⁰ 「福岡ベ平連 第一回会合」（会合レジュメ）1968年5月20日、九州大学大学文書館所蔵石崎昭哲史料：梅村浄オーラル・ヒストリー、2021年8月5日。

「1965年、安保の谷間、民青が社青同に換って教養部自治会をにぎった九大に、数学科の学生として入学した私は、大半が民青、後ろに革マルという奇妙なデモに参加していた。前と後ろではシュプレヒコールも歌も違っていたが、深く考えもせず、その間あたりを歩いていた。その頃、九大の数学者達が毎月10日、20日、30日に「ベトナム反戦十の日デモ」というのをやっている、担任の瀬口常民さん（あいつの部屋には出入りするなど民青から言われていた）から聞いた。「十の日デモ」は参加者が10人を切ることさえあるなかで、山田俊雄さんを中心に気負いもなく淡々と行なわれていた。こういうのもデモなのだと思ひかれ、毎回参加することになっていった。」⁹¹

そんな平嶋は、佐世保での計画を話し合っていた十の日デモの面々とはなく、誘っていた後輩たちと一緒に、民青系が主導権を握っていた九大学生自治会の用意した無料のバスで佐世保に出かけて行った⁹²。後輩を誘っていたので、交通費が不要な自治会バスで行くことにしたのである。

「でね、次に総評とか代々木とか一緒に、何か野球場で、あれを、まあ集会をやってデモをするということになってたんですが、前日から行かされて球場の警備をするんだとかなんかで、一日じゅう夜中じゅう起こされて。僕は別に、社青同解放派も別にどこも、本当にノンセクトだったので、別に民青に従ってたわけではないわけですよ。ですけど、何となく、タダだからと思って（笑）。どうせ行くんだしたら、タダのほうがいいかなと思って。…（中略）…いろいろ後輩を誘って、その民青のバスで行ってしまったものだから、後輩たちがまあ一生懸命〔警備など〕やってるのをほったらかして、「おれはこういうことのために来たんじゃない」と言って、朝、勝手にさっさと帰ってきましてね。」⁹³

これは、社共が共同で開催した1月18日の「原子力艦隊寄港阻止佐世保大集会」の際のエピソードである。民青が仕切る自治会から集会の警備を命じられたわけだが、このときの警備とは、反帝学評など三派系全学連を会場となった

⁹¹ 平嶋康昌「倉田さんに『酒を飲むこと』を教えてもらった、という話」、倉田令二郎著作選刊行会編『万人の学問をめざして—倉田令二郎の人と思想』日本評論社、2006年、374頁。

⁹² 九州大学では1962年6月、社青同が各学部自治会の上部組織で全学生の代表機関である学友会（箱崎キャンパス）の主導権を握り、1963年6月には教養部自治会（六本松キャンパス）も社青同が執行部を支配していた。しかし、民青系の巻き返しや、1965年に社青同解放派（この社青同解放派は、1967年には政治組織としては革労協、その学生組織としては反帝学評）が協会派との対立から分立するなどの過程で、1965年7月、九州大学の学友会の支配権は社青同から民青系に移った。また、教養部自治会も、同年6月に民青系が執行委員を独占、12月の代議員大会で民青系全学連への加盟を可決した。こうして、九州大学では1966年から1967年のあいだは、各学部自治会およびそれを統括する学友会は民青系が多数を維持、九州大学の学生運動は民青系の主導によって進められた（九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史第2巻：通史編Ⅱ』2017年、304-306頁を参照）。

⁹³ 平嶋康昌オーラル・ヒストリー、2008年3月10日。

野球場に入れさせないための警備を意味した。平嶋はデモに参加するために佐世保に出かけて行ったのだが、事前に聞かされていなかった警備——三派系学生を排除し、社共の既成政党動員参加者から分離する警備——をおこなうよう民青系自治会から命じられたのである⁹⁴。この体験以後、平嶋は民青主導の自治会に協力することを止めることにしたという。

「……野球場の警備をさせられて、ばかばかしいことやっつけられんというので帰ってきて。それで、みんなを反対のほうにオルグっちゃったんですよね（笑）。もう二度と〔民青が執行部を掌握する〕自治会と一緒にやるまいというふうに。その人たちが、後で言う反戦学連かな、なんかの主流になっていくんですよ。つまり、理学部の中の反代々木のあれなんかですわね、自治会の反対派をつくっていくんです。僕ら、「理対案グループ」と言っていましたね、理学部対案を、対案を出すだけで。」

平嶋は結局、佐世保闘争には積極的な参加をすることはなかった。その意味で、平嶋の佐世保体験は平井のそれとは対極的だった。しかし、佐世保闘争以前には党派を問わずデモに参加していた平嶋は、既成組織による行動の統制と排除の一端を担わされるという平嶋自身のネガティブな佐世保体験を経て、九大理学部での学生自治活動における反民青という旗じるしを鮮明にし、福岡ベ平連の活動にも参加していくのである。これもまた一つの「急進化」というべきであろう。佐世保闘争を機に、平嶋と同様あるいは類似の「急進化」を経験した学生や労働者や市民は少なくなかったのではないかと思われる⁹⁵。

4. まとめにかえて

本稿では、「激突政治」として理解されてきたエンタープライズ寄港阻止闘争を概観したあと、米軍基地が立地する九州北部の3つの都市におけるベトナム反戦市民運動がどのようなかたちで佐世保闘争に関り、その運動参加経験を経る中でそのような変容を遂げたのかを明らかにしてきた。さらに、福岡における十の日デモの会に参加していた3名の九大院生・学部生にとっての佐世保闘争の主體的経験を、オーラル・ヒストリー史料を活用しつつ検討した。それは、ゲバ棒を振りかざして機動隊と激突し、逆に尋常ならざる暴力を受け、

⁹⁴ この点は、2021年4月25日の平嶋康昌への電話インタビューで再確認。

⁹⁵ たとえば、長崎ベ平連は、地区労の動員で1月21日の社共共催佐世保二万人集会に参加したNHK長崎放送局の6人の女性たちが中心になって誕生したという。彼女たちの参加したデモはいったんは佐世保橋ですわり込んだが、彼女たちの希望に反して、地区労の指導で用意されたバスで予定通りに佐世保を離れることを余儀なくされた。その彼女たちが動員デモへの反発もあって選んだのが長崎ベ平連の結成だったという（『反戦市民』ここに誕生 長崎『朝日ジャーナル』1968年3月17日号、26-29頁）。長崎ベ平連の結成については、「パターンリズムとして表出する好意的セクシズム」に着目しながら、長崎における反戦「運動のジェンダー化過程」という、これまでの地域ベ平連研究では正面から扱われることがなかった分析視角を用いて詳細に検討した港那央「ベ平連と女たち——結成期の長崎ベ平連を中心に」『ジェンダー史学』第18号、2022年、47-61頁を参照のこと。

佐世保市民の同情やマスメディアによる擁護を勝ち得た三派系学生の行動とも、反体制のエスタブリッシュメントであった共産党や社会党や労働組合など既成組織の行動とも異なる質の自立した動きだった。それはまた、彼ら自身が参加していた十の日デモの会のそれまでの市民運動のあり方とも異なる情感と行動を伴った経験であった。「市民派」とか「過激派」、あるいは「暴力」と「非暴力」といったラベリングでは括り切れない情動の励起が、さまざま運動主体においてみられた。

そうした情動の励起は、十の日デモの会のあり方にも影響を与えた。佐世保闘争が十の日デモのメンバーに与えた影響について、倉田令二郎は闘争直後に次のように書いている。

「……佐世保市民の変化は「十の日デモ」内部にも大きな問題を投げかけた。「十の日デモ」は市民運動の理念を保持しながらも、参加者は大学教官、学生、自覚的な労働者などだけだ。市民は変わりうるものだということ、こんどはじめて佐世保で学んだ。「十の日デモ」の若手の有志は、「十の日デモ」を真に福岡市民のものとする道について討論し始めている。」⁹⁶

倉田は、十の日デモの再検討が始めたのが「若手の有志」であると注意深く書いている。それは、幅広の市民参加の場を提供することを運動の原理としていた十の日デモの否定ではなかった⁹⁷が、十の日デモの会とは別組織である「九大反戦青年委員会」⁹⁸と「福岡ベ平連」⁹⁹の結成として結実した。その経緯の詳

⁹⁶ 倉田令二郎『「十の日デモ」と佐世保市民——外から感じたこと』『朝日ジャーナル』1968年2月11日号、97頁。

⁹⁷ 平嶋康昌は、十の日デモと福岡ベ平連への自己の関わり方について次のように振り返っている。「ベトナム戦争下、米空母エンタープライズの佐世保入港を機に、「10の日デモ」は再編され、福岡ベ平連が結成された。「10の日デモ」員(?)なのかベ平連なのか、自己決定することなく、ピラ張りの日々へと突入することになった。倉田奥さん [=倉田ヒデ子] と、夜の博多の街にピラを張ってまわった」(平嶋康昌「倉田さんに『酒を飲むこと』を教えてもらった、という話」、倉田令二郎著作選慣行委員会編『万人の学問をめざして——倉田令二郎の人と思想』日本評論社、2006年、374頁)。

⁹⁸ 九大反戦青年委員会の結成集会については、『毎日新聞』西日本版、1968年4月14日朝刊に報じられている。九大反戦青年委の結成は、佐世保闘争を機に質的転換を遂げた社青同福岡の影響下で再建された北九州反戦青年委員会(1968年2月21日再建)に次いで、新たな組織原理で結成され反戦青年委だった。その過程は、別稿(市橋秀夫「写真史料が伝えるベトナム反戦運動——1968年北九州反戦青年委員会弾薬輸送阻止闘争の記録」『日本アジア研究』18号、2021年)で述べたとおりだが、社青同福岡は「開店休業状態にあった反戦青年委員会の再建」を提起し、個人加盟を原則とした「行動することを生命力とする組織」として、『組織の枠づけ』から自らを解放し自立性をもって活動するものの集団」となることを決定していた(『社青同福岡地本20年史(前編)』日本社会主義青年同盟福岡地区本部20年委編集委員会、1979年、61頁)。

⁹⁹ 九大反戦青年委と密接な関係を持ち、直接行動においては連携して取り組むことが常だった「福岡ベ平連」は1968年5月11日に結成されている(『ベ平連通信福岡』

細については別稿に譲るほかないが、佐世保闘争を機に、それまでの市民デモや市民集会とは異なる、非暴力直接行動と呼ばれる市民運動実践の道が切り拓かれることになった。十の日デモが九大知識人をはじめとする大人たちの静かな非暴力抗議行動だったとすると、福岡ベ平連には十の日デモ参加者の中の行動的な学生部分や、新左翼系の活動家社会人や労働者が参加し、すわり込みなどの非暴力直接行動に取り組む反戦運動を展開していくことになるのである。

もちろん、「非暴力直接行動」という運動スタイルについては、海外での実践例などの情報を、十の日デモの会のメンバーはとっくの昔に入手をしてはいた。そもそも十の日デモの会は、当初は、カリフォルニアでの非暴力直接行動にならった活動を展開しようということで結成の話し合いが始まったものなのである¹⁰⁰。しかし、1965年の結成当時には、それを実践する運動は展開されることがなかった。福岡における反戦市民の非暴力直接行動という運動スタイルは、佐世保闘争を構成した数々の小現場における多様な経験を経て初めて現実味を持ちはじめたのである¹⁰¹。

創刊号、1968年9月15日、12頁)。十の日デモの学生参加経験者を一つの核としつつ、ノンセクトの学部学生と学外の活動家や市民が参加して作られたベトナム反戦運動体である。

¹⁰⁰ 市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動の一研究——福岡・十の日デモの時代(2)」『日本アジア研究』12号、2015年、86頁。

¹⁰¹ W・マロッチェは、「粗雑な言い方だが、暴力によって『非暴力』が作動可能となった」と述べ、佐世保での「暴力の誇示・露呈 [display of violence] が結果的に「強大な国家暴力を白日の下にさらし、その合法性を奪い、同時にさまざまな政治的可能性を再活性化し広げた」と指摘している (William Marotti, 'AHR Forum Japan 1968: The Performance of Violence and the Theater of Protest', *The American Historical Review*, 114(1), 2009, p. 129)。マロッチェの整理の妥当性はさらなる検証が必要である。本稿ではメイン舞台での激突政治の効果ではなく、周辺のさまざまな小現場での現場経験がその後の福岡での「非暴力」のモメントをもたらす契機となった点を強調した。

Protests against the USS *Enterprise* Call at Sasebo and the Anti-Vietnam War Citizens' Movement in Fukuoka

Hideo Ichihashi

The "protests against the USS *Enterprise* call at the Sasebo" ("Sasebo Struggle") refers to the violent protests in January 1968, in which opposition political parties, the General Council of Trade Unions in Japan (Sōhyō), student movement organizations, and citizens' and cultural movement groups widely engaged in protest actions over the docking of the US nuclear-powered aircraft carrier *Enterprise* at Sasebo port. Many Japanese people feared that the visit of the *Enterprise* would lead to the 'nuclearization' of Japan and Japan's deeper involvement in the Vietnam War. The *Enterprise* arrived at the port on the morning of 19th January and departed on the 23rd.

At the time, the mass media extensively reported on the clash between the students of the three factions and the security police that occurred on the two bridges leading to the Sasebo US Naval Base. They simultaneously reported the "birth of the citizens of Sasebo", meaning that the gathering citizens became sympathetic to and eager to protect the "physical force" students, who were armed with helmets and long wooden sticks on their hands, from the brutal violence of the riot police.

At the root of these reports is the dichotomy of the "physical force" and the "moral force", the 'violence' and the 'nonviolence', often used in the study of the history of social and popular movements, and at Sasebo, it is understood that mutuality and multilayered nature were generated between the two in the course of the struggle.

This paper describes the Sasebo struggle experiences of the citizens and students who are members of the anti-Vietnam war citizens' movement in Fukuoka. Especially, analysing the involvement of the three students in detail, this paper not only points out the mutuality and multilayered nature of the two "forces" but also examines the dimensions that cannot be understood by the dichotomous typology of "extremists" and "citizens". The oral history method used in this paper has the utility of clarifying the subjective and emotional dimensions of the protests.

This focus on the fluid nature of the protest participants also seeks to bring to light the grassroots energy and dynamism of movements that are often overlooked in the history of social movements, which tends to evaluate social movements primarily in terms of their achievements, sustainability and effectiveness, leaving behind the actual people's feelings and actions.

Keywords: Protests against the USS *Enterprise*, Sasebo Struggle, Anti-Vietnam War Citizens' Movement, Fukuoka, Ju-nohi-Demo no kai (Fukuoka Tenth Day Demonstration Society), Beheiren, Violence

